

## 社長であり用務員

昭和二十八年生まれの私は五人きょうだいの末っ子。父・光治はとにかく私をかわいがった。記憶には残っていないが、おせんべいを噉んで軟らかくしてから食べさせたり、たれてきた鼻水をなめたりと、それはもう至れり尽くせりだったらしい。年を重ねてからの子供であり、当時は、埼玉の実家から東京に単身赴任中だったから、なおさら愛りしかつたのかもしれない。

中学でソフトボールを始め、試合中、捕手をしていった私の顔に打者のバットが直撃した時は、相手の女の子の家に怒鳴り込んだほどだ。勤務先の関西工で北海道転勤が決まりかけた時も、私が「一部活をやめたくない」と駄々をこねたら断ってしまった。

高校卒業後、実業団のユニチカ垂井（岐阜）で寮生活を始めると心配性に拍車がかかった。私が試合に出ないことを知り、監督に「レギュラーにすると言ったのに話が違う。娘は連れて帰る」とすごい剣幕で詰め掛けた時はあせんとしたものだ。それでも、每晚八時半に「元気にしてるか」と察まで電話をくれる父のことが大好きだった。

よく「最近の親は子供に甘すぎる」と言われるが、父はそれ以上だったかもしれない。だから、指導者になつてから選手の保護者が何を言っても全く驚かなかつた。「今も昔も親とはそういうものだ」と達観できたのも、父のおかげかもしれない。どんな時も味方でいてくれる存在が、厳しい練習を耐え抜く選手たちにとってどれほど支えになることか――。

日立高崎の監督を引き受



理事長  
NPO法人ソフトボールドリーム  
宇津木妙子

昭和28年(1953年)、埼玉県生まれ。61年に日立高崎の監督に就任。平成9年より8年間、日本代表監督を務め、五輪で2大会連続のメダル(銀、銅)を獲得。世界野球ソフトボール連盟理事。

父を憶う

けた時、父に掛けられた言葉は今も胸に刻んである。「監督はチームの「社長」であり「用務員」でもあるんだ。その覚悟はあるか」。三十二歳でチームを任せられた私は、練習も食事も、風呂も選手と共にし、球拾いなどの雑用も率先してこなした。指導者の道を進む上で、父の言葉はすべての礎となった。

今でも毎朝、仏壇の前で亡くなった父と母に手を合わせる。「私が選手たちを守れない時は、お父さんたちが天国から守ってあげてね」と。父の穏やかな笑顔を思い出すたび、教育とは何か、指導とは何か――。その初心を思い返すのである。